

山城祥二とは何者か

本田 学

組頭・山城祥二こと大橋力の
活性の全体像を捉えることは、
容易ではない。しかし、少なく
とも2つの切り口からのアプ
ローチが役に立つことは間違
ない。そのひとつは、山城のアク
ティビティが、現代の自然科学
のいくつかの専門領域、そして
いくつかの人文科学をカバー
し、しかもそれぞれの分野にお
いて抜kindでたレベルを実現し
ていることだ。

詳細は業績リスト(SYNOPSIS)に譲るが、例えば研究面では、
(ハイパーソニック・エフェクト)を
を発見、そして芸術面では、ア
ニメ『アキラ』の音楽で世界的
な人気を博している。1個の頭
脳がカバーするものとしては
破格の広さと高さである。ここ
に象徴される活性の全方位性と
それぞれの質の高さが、第一の
活性像を構成している。

もうひとつの活性像は、知的
活動を加速する新しい「概念道
具」を発明する名手、おそらく
天才であろうことだ。そのハイ
ライトとして、彼の創った〈本来〉
という生物学の概念道具に注目
してみる。地球生命のそれぞれ
の種は、己が進化的適応を遂げ
た特定の環境とあたかも「鍵と
鍵穴」のようにぴったり合った
活性を、遺伝子レベルで実現し
ている。こうした「特定生命種
と特定環境との特異的かつ全面
的な適合状態」に対するこれま
で空白だった科学的概念道具と
して〈本来〉(デフォールト)を
構築した。

学に由来する「生きることとは、
困難に耐え、努力し、克服し、
自分を造り替えること」という
偏った生命観から人類を解き放
つ。
その他に、〈もつとも貴いもの
地球〉〈プログラムされた自己
解体〉〈生命文明〉〈利他の惑星
など、山城によって発明された
概念道具は、(それが山城の発明
であることを知らない人をも含
め)多くの人の知的作業に量り
知れない恩恵をもたらしている。

山城が生み出すこうした概念
道具に共通する特徴は、何か新
しいものを造り出すのではなく、
埋もれている実体や真実を「掘
り起こす」点である。掘り起こ
されるまでは誰も想像すらしな
いののに、いったん掘り起こされ
るとあたかも最初からそこに
あったかのように、当たり前で
自然に感じてしまう。

以上は通念の枠組で捉えやす
い山城の活性像である。しかし
山城には、彼の身近で彼と一体
化して長い年月行動してきた人
間でないことができない
不思議な活性が、きわめて稀に
ではあるが顕れる。その驚きに
満ちた事実を、ごく限られた体
験者の1人として証言すること
は、自分の使命と考える。

まず、私自身が遭遇した象徴
的な出来事について、具体的に
述べる。その頃、私たち文明科
学研究所の研究チームは、人類
発祥の地アフリカ、カメルーン
の熱帯雨林で今も狩猟採集のラ
イフスタイルを堅持するピグ
ミーさんたちが、どんな環境の
中でどんな暮らしをしているか
調査していた。日本の何十倍も
の面積をもつ密林で移動生活を
しているピグミーさんに出遭う
ことは、グラウンドに落ちた1
本の針を探すより難しいといわ
れている。そんな日々を送る
2009年8月14日のこと、山
城はかろうじて自動車を通れる
道すがら見出した何の変哲もな
い1本の小径に注目し、「あの途
の奥にピーちゃんのニオイがす
れには現地のコーディネーターも

驚いて、付近にピグミーの村が
あるとは聞いていないと断言す
る。しかし山城はゆずらず、後
を追って2キロ足らず進むと、
木立の間に葉っぱの家からなる
集落が忽然と姿を現したのだ。
問題は、このときどうやって
それを見抜いたのか、山城本人
にもまったく解っていないので
ある。「途の探索」という〈未知
の範疇下にある彼の脳の思考・
行動の過程に、〈既知〉と区別の
つかない状態で「仮想的な途の
情報」が介入し、置き換わって



しまっていた。しかもそれが実
体を正確に反映していた。という
理解不能な現象が顕れたのであ
る。

本人にインタビュースると、
その内容は「デカルト的明晰判
明知」を構成し、離散性有限性
が明白で曖昧さはまったく認め
られない、という。この点で、い
わゆる「既視感(デジャヴユ)」
とも一致しない。この新たに知
られた脳機能に対して、山城は、
《仮想既知覚》という新しい概念
道具を創り対応させている。

こうした不思議な現象は、「奇
蹟的」と呼ばれるようなきわめ
て低い確率で人類の脳に惹き起
されるのかもしれない。ところが
この奇蹟のような現象が、山城
には再現しているのだ。私自身
はビグミーさんの件を含め都合
3回にわたって、それを体験し
ている。

そのもうひとつの例は、「耳で
音として感じる」ことができない
高周波を、身体のどこで感知し
ているのか? というハイパー
ソニック・エフェクト最大の謎に
答えを出した実験である。山城は、

超高周波の体表面受容を突きとめた4つの実験



それを「体の表面である」とす
る《仮想既知覚》から導いた図
に示す4つの実験から、ほぼ完
壁に証明している。ここで注目
すべきは、実験計画が「必要な
ものをすべて含む」と同時に「不
要なものひとつも含まない」
というデカルト的明晰判明知の
構造を具現しており、山城の《仮
想既知覚》のもつ「正確性」を
反映している。

さらなるもうひとつは、生物
が不適合な環境に遭遇すると、
自らを解体して土に還す《プロ
グラムされた自己解体》が地球
生命に実在することを実証した

実験。単細胞生物「テトラヒメ
ナ」のDNAに、「生きるのに不
都合な環境」を遭わせ「引導」
を渡した後、直ぐに最適環境に
戻すというやり方で自己解体は
一齐に起こる、という閃きとし
て介入してきたのがこの時の《仮
想既知覚》の骨子だ。実験の結果、
山城の予言どおりテトラヒメナ
は見事に自分で自分を溶かして
しまった。

これらに共通するのは、通常
の科学研究では定石とされる先
行研究の調査どころか、試行錯
誤のパイロット実験すら実施せ
ず、いきなり核心を突く実験だ
けが実行されて

いることだ。本人
にインタビュース
たところ、こうし
た脳の働きは、
自覚的にはまっ
たく制御できず、
非常に稀に、天
与のごとくいつの
間にか恵まれて
いる、ということ
だ。しかし身近
にみると、山城が

こうした《仮想既知覚》を「不
可視のレベルで平素からミクロ
に發揮しているのでは…」とい
う感覚を否定することができな
い。

厄介なのは、このような山城
がどう見ても「普通の人」の佇
まいをたたえていることだろう。
ケチャまつりでは、音響卓を操
作する山城をスタッフと勘違い
して、演目の開始時刻を尋ねる
人も多い。情が深く義に厚い。
食いしん坊で美味しいものを見
つける情熱と才能は当代随一。
その結果、多くの人にとって、
山城と自分との距離を実感しに
くいことは、私の経験から指摘
しておくべきだろう。あたかも
遠くの大きな山が近くに見える
ように、手が届きそうなのに近
づけば近づくほど遠ざかるので
ある。

このような山城の脳は、ホモ・
サピエンスの「正常」から少な
からず逸脱している。それを「病
理」として捉えるか、「進化」ま
たは「退化」の尺度で捉えるかは、
無視できない課題だ。私見を述
べるなら、おそらく山城の脳では、

非言語脳の働きと言語脳の働き
とが、理想的なバランスで成立
しているのだと思われる。彼自
身が著書『音と文明』の中で指
摘しているように、人間を含む

あらゆる動物の脳本体は非言語
脳で、言語脳はその上に造り
付けられた進化的に未熟なモ
ジュールに過ぎない(これも、
山城が発明した概念道具である)。
非言語脳は、絶えず複雑に変化
する膨大な環境情報を包括的に
処理し最適行動に結びつける。
ビグミーさんの村の発掘も、ハ
イパーソニックの発見も、美味
しいものを探し当てる嗅覚も、
そうした非言語脳をフルに働か
せたアウトプットであるため、
必然的に、本人も周りも言葉で
説明することができないのであ
ろう。人工知能によるビッグ
データのディープリングで

は決して追いつくことのできな
い、地球生命の脳の進化の最前線
というものは果たして言い過ぎだ
ろうか。こうした脳を搭載する
山城を頭にしたら私たちに課せら
れた地球史的な重みを思うとき、
身震いを禁じ得ない。

続・山城祥二とは何者か

本田 学

今年のケチャまつりパンフレットに掲載された「山城祥二とは何者か」という小論考の中でも、とりわけ反応の大きかった「〈仮想既知覚〉」について、さらに掘り下げて考察するにあたり、まず先の論考を簡単に紹介する。山城祥二こと大橋力の活性化の特徴として、そのアクティビティが自然科学・人文科学の壁を軽々と超える振がりと高さを併せもっていること、特筆すべき活性として、知的活動を加速する新しい「概念道具」を發明する天才であること、などが挙げられる。しかし、こうした通念で捉えやすい活性化像に加えて、それらとは大きく位相を異にする不思議な活性が存在する。たとえば広大無辺の熱帯雨林の中で現地のガイドすら知らないピグミーさんの集落の所在場所を予見したり、常識外れの結果を予知していたとしか思えない実験デザインを、最初か

ら設計するなど、〈未知〉であるはずの思考・行動の過程に、〈既知〉と区別のつかない状態で仮想情報が混入して置き換わり、しかもそれが実体を正確に反映している、といった活性である。山城は、自分自身のこうした活性化に「〈仮想既知覚〉」という概念道具を創り対応させている。

以上は、私の個人的体験であるが、実は「〈仮想既知覚〉」が発揮された動かぬ証拠が、誰でもわかる形で残されている。山城こと大橋は、1987年に『科学基礎論研究』という科学哲学分野の学術雑誌に「プログラムされた自己解体モデル」という論文を発表した。そこに、そのモデルを地球生命に当てはめた仮想的な概念図(図1)が掲載されている。この現象は、その後15年に及ぶ地道な研究の蓄積により、2002年に鮮明な写真として捉えられ実在が証明さ

れたのだが、驚嘆するのは、そこに写し出された姿が、実験開始より遙か以前に描かれたこの概念図と寸分違わぬものであったことである(岩波書店雑誌『科学』9月号参照)。科学研究では、仮説を立て、それを実験で検証し、その結果で仮説を修正するというプロセスを延々と繰り返すことで徐々に真実へ近づいて行くのが一般的である。しかし、ここに示された概念図は、30年以上を経た現在においても一切の修正が必要なく、最初からまるで写真を正確に模写したかのように描かれているのである。まさに鳥肌ものである。

以上は、科学領域の事例であるが、まもなく芸術領域においても、山城の「〈仮想既知覚〉」の成果を誰でも実感できるようになることを予告しておきたい。詳細は次稿のA K I R A 4 K R I マスターの紹介に譲るが、この論考を書くに先立ち、私は山城によって刷新された音楽を試聴する機会に恵まれた。その折、これまで個人的にはもはや改善

の余地がないと感じていた音質が、次元の違うものに変貌し飛翔していたことに戦慄すら覚えたのである。

先の論考では、こうした山城の不思議な活性について、地球生命の脳の進化の最前線にあるホモ・サピエンスの非言語脳をフルに使った情報処理なので、本人も周りも言葉で捉えて明晰判明に理解することができないのではないかと考察したが、これをさらに深めてみたい。それがあたり、山城が著書『ハイパーソニック・エフェクト』のむすびで論考している、バリ島の伝統

的社會にみられる「スカラ・ニスカラ」から構成された二元論的コスモロジーを紹介する(図2)。

バリ島の伝統的共同体では、「知覚でき、意識で明瞭に捉えることができる顕在的なもの」(「スカラ」と、「知覚できず、意識で捉えることができない潜在的なもの」(「ニスカラ」)の両方から世界が構成されているとする二元論的コスモスが想定されている。山城は、こうした明示的な「スカラ」を制御するの

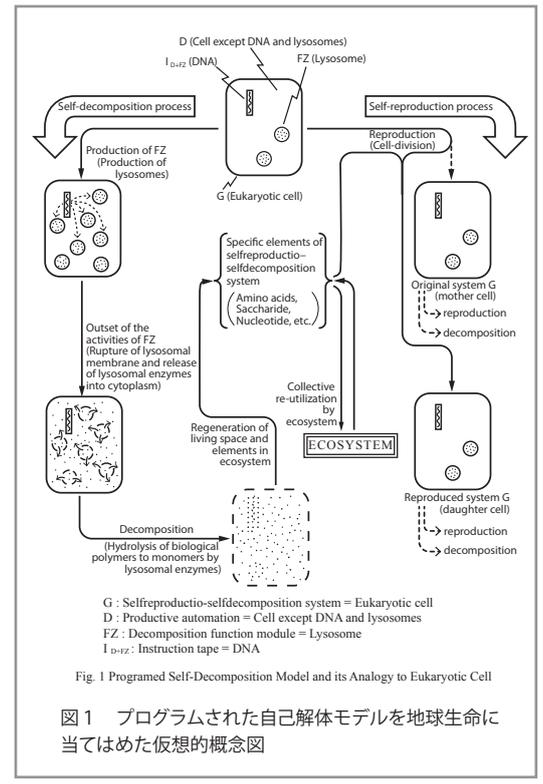


図1 プログラムされた自己解体モデルを地球生命に当てはめた仮想的な概念図

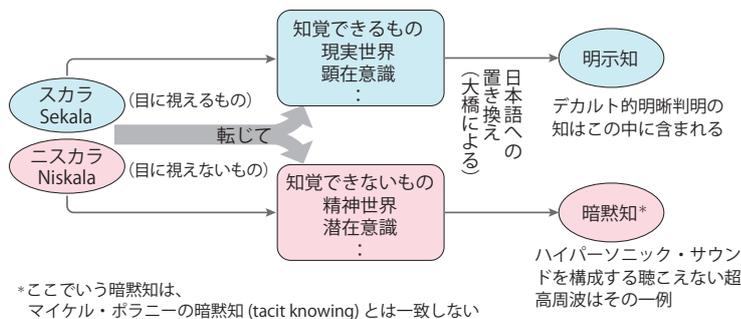


図2 バリ島の二元論的コスモロジー

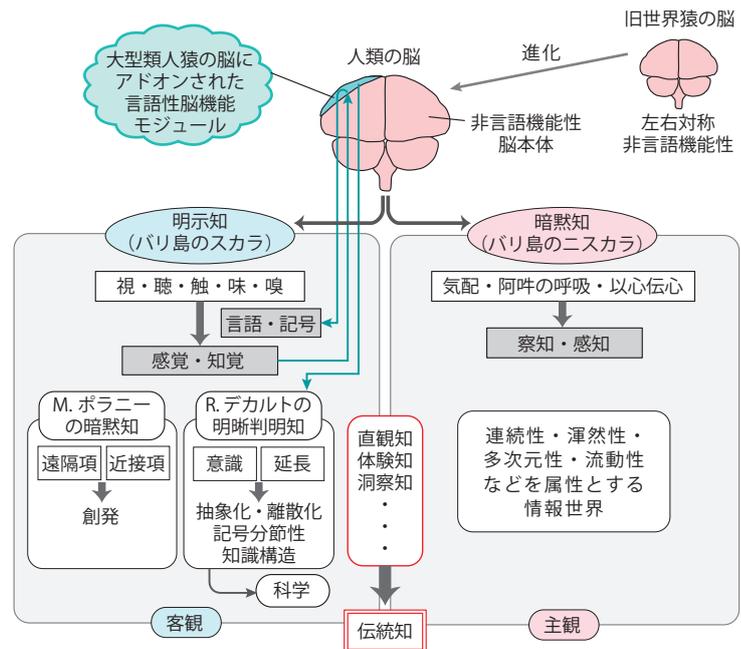


図3 大橋によるバリ島の二元論的コスモロジーを支える脳機能モデル

を提唱している(図3)。そして、
 〈スカラ〉と〈ニスカラ〉、すな
 わち客観の世界と主観の世界と
 を結びつけバランス良く制御す
 ることにより、ハイパーソニッ
 ク・エフェクトの発見を導いたと、
 自ら著書の中で振り返っている。
 確かにその通りであろう。

しかし、〈スカラ・ニスカラ〉
 をバランス良く制御するのは、
 いわばバリ島文化という脳機能

体系の力であり、その体系を学
 びつつ脳を鍛えれば、ある意味
 だれでも到達できるものと言え
 る。これに対して、〈未知〉と〈既
 知〉とが置き替わり、しかも〈未
 知〉であるはずの部分が〈既知〉
 のごとく正確に実体を反映して
 いる〈仮想既知覚〉を生み出す
 ためには、曖昧で漠然とした非
 言語脳の働きを、明晰判明な言
 語脳の働きに直結して昇華させ
 る何らかの脳機能が必要となる。

それはあたかも、三次元の世界
 ではまったく同じに見えるもの
 が、四次元の世界から眺めると
 明瞭に違って見えるように、私
 たちが生きている現実世界の時
 空間を、より高い次元の時空間
 に写像するような機能を具えた
 特殊な情報処理レイヤーと言え
 るかもしれない。

こうした情報処理レイヤーが、
 ホモ・サピエンスの正常の脳に
 搭載されているという証拠は今

のところにない。〈仮想既知覚〉を
 具えた山城の脳を、生理・病理、
 あるいは進化―退化の軸のどこ
 に位置づけるかは、大きな課題
 であるが、少なくとも、経験や
 訓練、文化的洗練などでは到達
 することのできない特異性を
 もったものであるとは言えるで
 ありう。

こうした三次元の世界を四次
 元から眺めるような山城の〈仮
 想既知覚〉の存在を視野に収め
 ると、実はそれが平素から不可
 視のレベルでミクロに発揮され
 ることによって、芸能山城組は
 生き延びてきたということをも、
 私を含む山城の弟子たちは認め
 ざるを得ない。ご承知の通り、
 芸能山城組は規約も綱領ももた
 ず、組織内の序列も曖昧で、創
 流当時は「向かい風の曠野を一
 人ゆく」「無法の徒党」とすら
 呼ばれていた。そんな私たちが、
 45年も潰れずに生き延びて来ら
 れたのは何故か？それは、組織
 運営のあらゆるミクロな局面で、
 〈仮想既知覚〉脳機能レイヤー
 を搭載した頭の山城が、荒れ狂

う海の中の目に見えない潮目を
 読み、それを先取りするかのよ
 うな人智を超えた舵取りをして
 きたからに他ならない。ホモ・
 サピエンスとして特殊な脳機能
 を搭載した山城との距離を正確
 に見定め、どこまでが文化によ
 り到達可能な領域で、どこから
 が山城〓大橋に特異的な領域な
 のか、その実態を正確に認識し
 反映したうえで、今後の人づく
 り群れづくり祭づくりに取り組
 んで行く。このことが弟子たち
 一人一人が直面する重い課題と
 なっている。

日本を代表する経営者であり
 詩人でもあった故・堤清二(辻
 井喬)氏は、1984年に、「彼
 のような希少生物がいかにして
 生息していけるのか・・・山城
 組組員がそういう類いまれな生
 物とどう折り合いをつけていく
 のか」が課題だと、非常に鋭い
 洞察を述べている(季刊・地球
 32号、山城組出版局)。堤氏の35
 年来の問いかけに、覚悟をもつ
 て対峙する。今年のケチャまつ
 りはそれが試される場でもある。

業績リスト

受賞 (抜粋)

国際賞

- ・ダルマ・クスマ勲章〈インドネシア・バリ島の文化勲章〉(山城祥二,1992)
- ・グルジア国際文化賞(1990)
- ・中山賞大賞〈生命科学の国際賞〉(大橋 力, 2000)
- ・ECAL ベスト論文賞(前川督雄, 2011)
- ・NHK テレビ音楽劇「虎落笛」: イタリア賞・イタリア放送協会賞 (1976)
- ・テレビCM「クリネックス」: 国際放送広告賞(1978) クリオ賞(1979)
- ・ラジオCM (ソニー): クリオ賞 (1980)
- ・ベストソリスト賞〈世界合唱音楽祭 (旧ソ連邦)〉(大滝 伸) (1988)
- ・LD「アキラ／サウンド・クリップ by 芸能山城組」: A V A グランプリ (1988)
- ・Suksma Bali Award 〈バリ島のサステナビリティに貢献〉(大橋 力, 2019)

国内賞

- ・ラジオCM (ソニー): ACC 賞ほか (1979)
- ・第5弾LP「芸能山城組ライブ」: 日本レコード大賞企画賞(1979)
- ・映画「AKIRA」の音楽: 日本アニメ大賞最優秀音楽賞 (1989)
- ・旅の文化賞 (1994)
- ・日本バーチャルリアリティ学会論文賞 (1999)
- ・木村重信民族芸術学会賞 (大橋 力, 2004)
- ・第22回日本プロ音楽録音賞ハイレゾリューション部門「審査員特別賞」(大橋 力, 2015)
- ・第23回文化庁メディア芸術祭 功労賞 (山城祥二, 2020)

音楽・映像作品 (抜粋)

■ 芸能山城組オリジナルCD・LP (JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント)

- ・「恐山／銅之剣舞」(1976)・「地の響」(1976)・「やまと幻唱」(1977)・「黄金鱗讃揚」(1978)・「芸能山城組ライブ“開かれた合唱”十年の展開」(1979)・「少年達への地球讃歌」(1980)・「シルクロード幻唱」(1981)・「ビザンチンの響」(1981)・「アフリカ幻唱」(1982)・「輪廻交響楽」(1986)・「AKIRA オリジナル・サウンド・トラック」(1988)・「Symphonic Suite AKIRA (交響組曲アキラ)」(1988)・「芸能山城組入門」(1988)・「翠星交響楽 Ecophony Gaia」(1990) ほか全 16 タイトル

■ JVC ワールドサウンズ (JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント) 企画・構成 山城祥二, 録音・解説・写真 大橋 力全 101 タイトル

■ DVD/Blu-ray ディスク

- ・「AKIRA DVD SPECIAL EDITION」の音楽, バンダイビジュアル (DVD, 2001)
- ・ハイパーソニック Blu-ray 「AKIRA」 バンダイビジュアル (2009)

■ ハイレゾリューションオーディオ配信コンテンツ [ハイパーソニック・ハイレゾ音源 by オオハシ・ツトム] (e-onkyo、VICTOR STUDIO HD-Music 他から配信)

- ・第一弾: 「恐山／銅之剣舞」・「チベット密教 極彩の響き」・「超絶のスーパーガムラン ヤマサリ」・ハイパーソニックオルゴール「トロイメライ」(2014)

- ・第二弾：「輪廻交響楽」・「ブルガリアン・ポリフォニー(Ⅰ)」・ハイパーソニックオルゴール「卒業写真」(2015)
- ・第三弾：「交響組曲 AKIRA 2016」(2016)
- 芸能山城組オリジナル LP (米国 Milan Records)
「Symphonic Suite AKIRA」LP2 枚組 (山城祥二監修による DSD11.2MHz のハイパーハイレゾ音源を使用) (2017)
- AKIRA 4K リマスターセット (4K ULTRA HD Blu-ray & Blu-ray) (バンダイナムコアーツ (2020) , NBC ユニバーサル・エンターテインメントジャパン(2022))

著作 (抜粋)

- ・群れ創り学, 山城祥二, 1981 年, 徳間書店
- ・情報環境学, 大橋 力, 1989 年, 朝倉書店
- ・音と文明-音の環境学ことはじめ, 大橋 力, 2003 年, 岩波書店
- ・脳の中の有限と無限, 『科学』, 大橋力, 2006 年-2015 年, 年 4 回連載, 岩波書店
- ・ハイパーソニック・エフェクト：超高周波が導く新たな健康科学, 『科学』 2013 年 3 月号, 大橋 力他, 岩波書店
- ・音楽・情報・脳, 仁科エミ・河合徳枝編著, 2013 年, 放送大学教育振興会
- ・ハイパーソニック・エフェクト, 大橋 力, 2017 年, 岩波書店
- ・利他の惑星・地球, 『科学』, 大橋力, 2019 年 4 月号～2022 年 3 月号連載, 岩波書店

論文 (抜粋)

- ・プログラムされた自己解体モデル, 大橋他, 科学基礎論研究, vol. 18, 21-29, 1987.
- ・Inaudible high-frequency sounds affect brain activity: A hypersonic effect, Oohashi T, et al., Journal of Neurophysiology, 83: 3548-3558, 2000.
- ・Catecholamines and opioid peptides increase in plasma in humans during possession trances. Kawai N, et al., NeuroReport, 12: 3419-3423, 2001.
- ・Artificial Life Based on the Programmed Self-Decomposition Model: SIVA, Oohashi T, et al., Journal of Artificial Life and Robotics, 5: 77-87, 2001.
- ・Electroencephalographic measurement of possession trance in the field, Oohashi T, et al., Clinical Neurophysiology, 113: 435-445, 2002.
- ・The role of biological system other than auditory air-conduction in the emergence of the hypersonic effect, Oohashi T, et al., Brain research 1073-1074: 339-347, 2006.
- ・Frequencies of inaudible high-frequency sounds differentially affect brain activity: positive and negative hypersonic effects, Fukushima A, et al., PLoS One, 9, e95464, 2014.
- ・Electroencephalogram characteristics during possession trances in healthy individuals, Kawai N, et al., Neuroreport, 28, 949-55, 2017.
- ・Induction of prolonged natural lifespans in mice exposed to acoustic environmental enrichment, Yamashita Y, et al., Sci Rep., 8, 7909, 2018.
- ・Positive effect of inaudible high-frequency components of sounds on glucose tolerance: a quasi-experimental crossover study, Kawai N, et al., Scientific Reports, 12, Article number: 18463, 2022.